

# インスタントパーク 「田んぼサッカー」の共創



# 1. 可能性の探索

“インスタントパーク「田んぼサッカー」の共創”の大きな目的は地域の持続と次世代育成に向けた華麗なる転換を起こすこと。足元を観察して、“資源”というものを見直して、そこから新しい価値を”生み出す”。そのための思考、協働、行動の潜在力を高める場づくりです。

ポイントは異体験。ハッと突然に視点が変わる空間創造。そういうことならこんなことができる！という可能性の探索を背中押すアハハな刺激性。

そこで田んぼサッカー。地域の子供、大人に呼びかけ、スタッフも巻き込んだ集まりをつくる。非日常で自然があってこそその環境・雰囲気をつくり出して人間関係を瞬間的に形成。その上で、伝統的農業の文化やあり方に触れながらスポーツに接近する。エキサイティングな体験に自身のアイデアを組み入れ”新しい”を生み出す。その感覚を勇気に変えていくプログラムです。

本事業はこうした企画に共感した公益財団法人麒麟福祉財団の助成により実現しました。前年度インスタントパーク「田んぼボルダリング」の共創に引き続いて2年連続の援助には感謝の気持ちでいっぱいです。このような活動が根付いて長編の物語としてエピソードを重ねていくとしたらそれこそが「地域の力」ではないでしょうか。そんなことを思いながら本冊子を製作しました。



# 2. 物語を綴る

田んぼサッカーの共創が大切にしていることは「地球にやさしい」と「もったいない」です。そして、そうした気持ち・活動をストーリー（物語）にすることです。

大きく3つの工程を経て、実践に至りました。①社会との接点づくり、②チームづくり、③本番の準備です。異常気象による猛暑。突風が吹くなどエライコッチャな事もあり遅れは出ましたが準備は無事に進みました。ただし準備に過度な手間をかけるとスタッフが疲弊するというのも忘れてはならない教訓となりました。



### 3. なんでもつくる

田んぼサッカーの共創プロジェクトが、人を元気にする要素は何か？ そのひとつは「つくる」です。モノ・コトの両方で作る(創る)作業は人をイキイキさせます。

地方で従来型の稲作を続けるのか、あるいは、耕さず、炭素を貯留しやすい土づくりへ転換するのか、省力化、燃料や化学物質の削減、生物多様性を含めて、これからの農業にヒントとなるような田んぼピッチ、藁ボール、旗、ビブス、スタッフTシャツなどを手作りしました。



### 4. 田んぼ体操

2023年11月25日(土) 13:30-15:00。プログラム本番の1日目です。受付、チェックインしてファームツアーを行いました。どういう場所なのか、誰とどんな体験をしようとしているのかを予感してもらいます。

次は田んぼ体操です。田んぼサッカーを安全に楽しむための準備運動でアイスブレイクを兼ねています。①体をほぐし体を温める。②仲良くなる、③共同への関係促進に効果するよう体操を大学生スタッフ外館健人君が考案しました。ヒントは伝統の遊び「手つなぎ鬼」です。



## 5. 藁ボールの製作

田んぼサッカーでは、オリジナルの田んぼサッカーボールづくりにチャレンジしました。講師の宮内龍太郎さんがアフリカでの活動経験から考案したのですがビーチボールに藁縄を巻いて製作しました。

藁はFarm19の稲作の産物です。縄の編み方は日本古来の方法をスタッフでもある地域のシニアから習います。ただし子供達は、直接ではなく、地域シニアから習った大学生や年長のお姉さんを通じて学びます。地域の持続のための学び合いと伝承力を養うためです。藁縄づくりには全員がハマってしまい止まりませんでした。



## 6. 心にフォーカス

1日目の課題はボールの製作とルールづくりでしたが、宮さんこと講師の宮内龍太郎さん（日本サッカー協会公認指導者）の冒頭の言葉にみんなハッとしました。

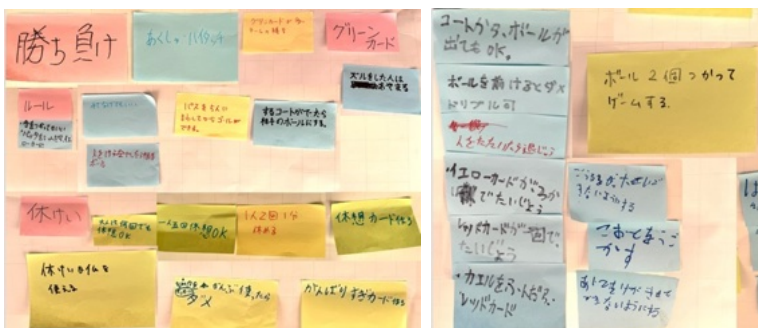
サッカーとは「アソシエーション・フットボール」。そこで第1に大切なことは「リスペクト」（尊敬・互いの気づかい）。第2は、ルールは「楽しい」をつくるためのもの。従って、ルールは競技者自身が開発して決めていく。もっと面白くするアイデアや不都合があれば試合しながら変更する。第3はそうした共同の社会化。そのためのチームづくりである。

こうしたインプットをもとにキッズワークショップをした結果、得点数ではなく試合中のグリーンカード獲得数で勝敗を決めることになりました。これこそがFarm19の田んぼサッカー。サッカーからラグビーができたように田んぼサッカーならぬ「Farm19」が誕生しました。



## 7. ルールの開発

サッカーのルールづくりは「楽しいをつくる」ことが基本であることを宮さんから学びました。このことは実際のまちづくりやゲーム空間のシミュレーションにおいても同じでナルホドなルール開発に引き込まれることが多いのですが、他方、今回は、田んぼ体操で息が切れた人がいたのか、ワークショップしてみると「休憩」というキーワードが目立つ結果となりました。



## 8. 栄養補給

子供が対象のプログラム、特に、体を動かしたり、脳の活性化がポイントの場合には、水分と栄養の適切な補給は不可欠です。そこに、美味しい！それは何故？の体験が伴うと健全で健康意識の高い成長発達を助けます。

そこで田んぼサッカー午後プログラムではおやつとして徳島県の特産で準完全栄養食のサツマイモを使って焼芋をつくりました。石焼き芋は何故甘い？ワークショップも開催。お芋の温度を測り、でん粉を糖に変える酵素β-アミラーゼの性質と働きについて学びました。



## 9. ルーチンの大切さ

2日間プログラムの良さは内容が豊富になることに合わせて繰り返しのリズムをつけてルーチンワークにできることです。田んぼ体操はそのひとつ。やるぞー！という気持ちを整えて物事を客体視する力に変えていきます。



## 10. 仲良くなる

緊張がほぐれて楽しみ方が変化し始めました。



## 11. チーム分け

審判からルールの確認がありました。副審からはボールの硬さや強度のチェックがありました。そして、体力や運動能力のバランスで2チームに分けられました。



## 12. 第1ゲーム

第1ゲームは子供だけで対戦。11:14~11:22の8分間でした。途中、チーム「とうい」が1点をゲット。特徴的だったのは終始一貫して個人プレー。パスをすることはなく味方同士でもとにかく蹴り合って田んぼサッカーを楽しんでいました。



## 13. まるで劇場

さあー来い！



ヘディングシュート！



## 14. 第2ゲーム

第2ゲームは、親子ではない大人と子どもがペアになり手をつないで試合しました。11:30～11:39の9分間でした。なにがあっても手を放してはいけない。なんでもかんでもふたりでやります。特徴的だったのは子供達だけのゲームに増してエキサイトしたことです。





## 15. ノーサイド

Farm19田んぼサッカーは得点を競うのではなくサッカーとは何か？から始まり互いを尊敬する(気づかう)ことを土台に「楽しい」をつくるためのルールや道具を参加者が対話的に開発するというものでした。勝敗はゲーム中の「気づかい」に与えられるグリーンカード数で判定。サッカーならぬ「Farm19」という新スポーツの誕生です。爽快で満足度の高い実践となり「次も参加する！」という大きな声でノーサイドとなりました。



## 16. いただきまーす

田んぼサッカーの最後を飾るのは田んぼファイアーランチです。みんなで火を起こし、Farm19の田んぼで採れた今年の新米を食べました。お米はサッカー場となった田んぼで、無農薬、無肥料で栽培、収穫されたものです。

マッチの刷り方、火起こしを学びながら、自作の竈門にセットした羽釜で炊いたご飯はなんと美味しいこと。お焦げもありました。おかずはご近所のお母さんの手作り「野菜いっぱい豚汁」。使用したお味噌は裏の醤油屋さんの名品です。一汁一菜。粗食なれど、栄養バランスを考えたヘルシー&ローカルランチ。

自然とつながることは何物にも変え難い美味しさと幸福感をつくりだします。マイ茶碗、マイ皿、マイ箸を持ってきて、空の下で食べました。ローカル、地域の持続のあり方、農業の役割、母なる大地「地球」の保全などを、感じたり考えながら、いただきまーす。ごちそうさ



## 17. 古き良きに触れる



## 18. チェックアウト

田んぼサッカー 2日間 (2023/11/25-26) プログラムが無事終わりました。

新しい田んぼスポーツ"Farm19"が生み出され、参加者のみなさんには楽しんでもらえた様子です。

いつものようにチェックアウトして、それぞれが2日間をふりかえりました。感じたことや収穫(ハーベスト)などを共有しました。そして散会しました。

冒頭で共有した(最後に撮影した)集合写真に表現されているように愉快で楽しい実践となりました。

助成くださった麒麟福祉財団、駆けつけてくれた応援団、関係各位、スタッフにはあらためて感謝と御礼を申し上げます。

というのが主催者の振り返りでした。



## 19. 余韻

最終日、プログラムが終了しても、子供達は帰ろうとしません。ホッとした時間ながら、最後まで目を離さず、が基本です。



## 20. 田んぼボルダリング

田んぼサッカーの原型は前年に実施した田んぼボルダリングの実践です。同じく麒麟福祉財団の助成で2022年7月～11月に合計8回実施。ボルダリングジムとの相違点はマットではなく水田に着地してバッシュンという他にない「ヌルヌル・泥んこ感覚」を味わえることです。保育士資格を持ったボルダリングコーチ浅井政臣さんの指導のもと子供達はできそうで・できない面白さ。学校にはない地域ならではのクライミングを体験しました。



# 21. コロナ禍

田んぼボルダリングは「公共」を共創する取り組みでした。空き田んぼを活用したインスタントパークを手作りして、子供や若者にはドキドキ・ワクワクなクライミングスペースに、コミュニティにとっては健康で元気な子供を育てる「みんなの場所」になることを考えていました。

ところが、新型コロナウイルス感染症パンデミックは収束せず、ウクライナとロシアの戦争まで勃発し、資材価格が急騰して当初計画を見直しました。参加者集めや当日の健康チェックにも苦労し、どうなるのか！？悩みました。

一方で資材価格急騰対策で導入した木製の麒麟像はいつの間にか地域のモニュメントになっていたり、子供達には「世界で唯一の夏休みづくり」の機会となり、想定通りではなかったものの、やり切ることの大切さを学びました。



# 22. キリンモデル

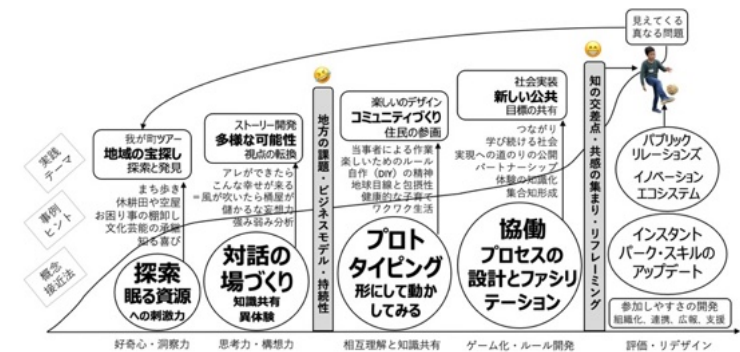
公益財団法人キリン福祉財団「地域の力・応援事業」による2つのインスタントパーク共創プロジェクトの実践からキリンモデルが開発されました。助成への感謝の意を表してこう名付けましたが正式には「地域の力はゆっくり形になっていくぞキリンモデル」としています。

参考にしたのは、デザイン思考の考え方と方法論[1]、欧州委員会（European Commission）と欧州地域委員会（European Committee of the Regions）によるイノベーションメソッドのテキストなどです[2][3]。

[1] Tim Brown (2019) Change by Design, Revised and Updated: How Design Thinking Transforms Organizations and Inspires Innovation, HarperBusiness  
 Harper Business; Revised, Updated版  
 [2] Gabriel Rissola, Hank Kune, Paolo Martinez (2017) Innovation Camp Methodology Handbook, Publications Office of the European Union, Luxembourg  
 [3] Kennisland Nesta (2019) Playbook for Social Innovation, European Social Innovation Competition 2019 [CC BY 4.0], European Commission.

## キリンモデル (ver.202402)

「地域の力はゆっくり形になっていくぞキリンモデル」



## 23. 台本

田んぼサッカーならびに田んぼボルダリングのインスタントパークプロジェクトは米国オレゴン州ポートランドの住民運動「シティリペア（街の修繕）」の実践[表1]と、北欧で展開された未来づくり活動が開発したイノベーションキャンプメソッド[表2]を下敷きにしています。特にポートランドのNPOシティリペアは住民による交差点づくりと道路活用には大きな影響を受けました。

表1 シティリペア場づくり実践手順の基本

- ①会話する（簡単に深められる話題）
- ②輪の拡大（仲間や共感者を集める）
- ③連携（パートナーシップの構築）
- ④可能性の探索（多くの可能性の収集）
- ⑤ビジョンの形成（目標の開発と共有）
- ⑥クリエイイト（創造、考案、制作等）
- ⑦世話役をする（自分事）

表2 イノベーションキャンプメソッドの1例

- ①可能性の探索とチャレンジづくり
- ②リフレーミング（視点の見直し）
- ③改めてのアイデア出しと精緻化
- ④賛同の得られたアイデアの掘り下げ
- ⑤プロトタイピング（即時的作り上げ）
- ⑥ビジネスモデル開発（持続性の担保）
- ⑦表明と社会実装（試行的な現場運用）
- ⑧説明力向上とプレゼン（1分ピッチ）
- ⑨社会を変える力の予測（インパクト）
- ⑩スケールメリット（広げて育てる戦略）
- ⑪システム変更（行政等の組み込み検討）
- ⑫ツール（チーム開発、アイデア創出法等）
- ⑬パートナーシップ（調達、連携、協働）

## 24. 未来と課題

Farm19のインスタントパーク活動が目指していることはパブリック（新しい公共）の形成です。加えて、社会変革を担うイノベーター（チェンジメーカー）の育成です。小さな集まり、小さなアクションから始めて、息長く育てようとインスタントパーク活動を始めました。

あらためてインスタントパークとは「人が集まり、共有とオープンを基本に、体験や協働を通じて、これまでにない新しい知識、集合知、地域の持続や健康な暮らしに必要な考え方、アイデア、解決策などを生み出していくこと、あるいはそれを可能にする場」です。

パブリックは、ジェフ・ジャービスさんによると、つながりをつくり、協働、知識、寛容さを生み出します。偏見を解き、信用や組織する力を高め、我々を守ります（※）。

もちろん地域活動には難問ばかりです。人を集め、共感を得て、つながり続けること、資金と収入、住民参加、立地、修正と更新などが今後の課題となりました。

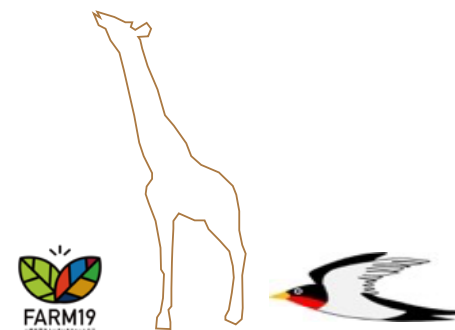
それでもなお、パブリック（新しい公共）に意識を向け、変化を見える形にできれば、地域は持続し、新しい世代が育ってくると信じています。

本プロジェクトでたくさんのことを学びました。  
これからもよろしくお願いいたします。

一般社団法人いきいきファーム立江  
代表理事 吉田 敦也  
2024年2月28日

（※）ジェフ・ジャービス(2011)パブリックを開かれた  
ネットの価値を最大化せよ。NHK出版

印刷：2024年2月28日  
制作：吉田 敦也  
印刷・製本：  
一般社団法人いきいきファーム立江 (Farm19)  
徳島県小松島市立江町南田頭3



一般社団法人いきいきファーム立江 (Farm19)  
徳島県小松島市立江町南田頭3  
公式Webサイト：<https://farm19.jp/>  
メール：[farm19t@gmail.com](mailto:farm19t@gmail.com)